＜認知症対応型共同生活介護用＞

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
Ⅰ．理念に基づく運営	11
1．理念の共有	2
2．地域との支えあい	1
3．理念を実践するための制度の理解と活用	3
4．理念を実践するための体制	3
5．人材の育成と支援	2
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1．一人ひとりの把握	1
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3．多機能性を活かした柔軟な支援	1
4．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1．その人らしい暮らしの支援	9
2．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	2376200230
法人名	有限会社　おおぎもと
事業所名	グループホームＪＯ･さざんか第2
訪問調査日	平成20年9月22日
評価確定日	平成20年10月17日
評価機関名	特定非営利活動法人 中部社会福祉第三者評価センター

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

［取り組みの事実］

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

［取り組みを期待したい項目］

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

［取り組みを期待したい内容］

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 ＝家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家　族 ＝家族に限定しています。

運営者 ＝事業所の経営･運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員＝ 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム ＝管理者･職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

[認知症対応型共同生活介護用]

1. 評価結果概要表

作成日　平成20年10月20日

【評価実施概要】

事業所番号	2376200230
法人名	有限会社　おおぎもと
事業所名	グループホームJO･さざんか第2
所在地 (電話番号)	愛知県豊田市大蔵町花立11番地7 (電　話)　0565-69-0150

評価機関名	特定非営利活動法人　中部社会福祉第三者評価センター		
所在地	愛知県名古屋市昭和区鶴舞3－8－10　愛知労働文化センター3F		
訪問調査日	平成20年9月22日	評価確定日	平成20年10月17日

【情報提供票より】(平成20年8月30日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成16年7月15日	
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計　9　人
職員数	15　人	常勤　5 人, 非常勤　10 人, 常勤換算　7.33 人

(2) 建物概要

建物構造	木造
	1 階建ての　階 ～　1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃 (平均月額)	21,000　円		その他の経費 (月額)	34,200　円
敷　金	有 (　円)		(無)	
保証金の有無 (入居一時金含む)	有 (　円) (無)		有りの場合 償却の有無	有／無
食材料費	朝食	200　円	昼食	350　円
	夕食	350　円	おやつ	100　円
	日額　円			

(4) 利用者の概要 (8月30日現在)

利用者人数		9 名	男性　6 名	女性	3 名
要介護1		3　名	要介護2	2	名
要介護3		4　名	要介護4	0	名
要介護5		0　名	要支援2	0	名
年齢	平均	83.3 歳	最低　66 歳	最高	101 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	足助病院　珊瑚歯科

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

ホームの名称の「JO」は理念の「恕」の英文表記であり、「さざんか」は合併前の町の花に由来する。樹齢100年を超す山茶花の古木が、どの家庭の庭先にも残っているという山あいの町にホームはあった。畑1枚を隔てたところに立っている「JO･さざんか第1」に遅れること2年余、地域の期待を担って「第2」が開設された。「第1」同様、ホーム開設以来の職員がおり、職員の安定度やチームワークは比類がない。4年の歳月の流れによって、利用者の高齢化や介護度の進行は否めないが、利用者は生き生きと自分のペースを守って生活している。山村ゆえ、医療機関との連携面での課題は残るが、管理者が看護師であることや管理者の自宅がホームのすぐそばであることから、家族も絶大の信頼感と安心感を持っている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	**前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況 (関連項目:外部4)** 前回指摘4件のうち、地域密着をうたった理念については、基本理念「恕」を受けた基本方針、介護方針の中に盛り込まれている。重度化のへの対応も、ホームの方針を確立している。災害時の備品も準備されていた。栄養管理については、継続しての取り組みを願うこととした。 **今回の自己評価に対する取り組み状況 (関連項目:外部4)** 自己評価を管理者独自の判断で行っており、一般職員の参画度合いは低いが、外部評価制度の意義や目的は理解されている。自己評価への職員参加は、職員の能力開発面からも有効な教育手法となる。次代を背負う職員育成をも見据えて、職員の自己評価への関与を増やしていくことが望まれる。
重点項目②	**運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み (関連項目:外部4, 5, 6)** 2ヶ月に1度、定期的に運営推進会議を開催している。同じ理念、同じ方針で運営されている「グループホームJO･さざんか」が目と鼻の先にあり、毎回合同開催となっている。一方のホームでの課題を両方のホーム共通の課題としてとらえ、問題や事故等の発生を未然に防ぐための予防処置的な対応もみられる。
重点項目③	**家族の意見、苦情、不安への対応方法･運営への反映 (関連項目:外部7, 8)** 家族から出た意見や要望は、ミーティングで職員全体の問題として討議されている。家族側からの申し入れがあり、ホーム内で起こった事故についての合意文書が取り交わされた。これは、職員の業務を委縮させないための家族側の配慮である。ホーム便り等にも趣向を凝らし、家族への情報提供にも力を入れている。
重点項目④	**日常生活における地域との連携 (関連項目:外部3)** 利用者も職員もほとんどがこの地域の出身者である。近所の農家から野菜の差し入れがあったり、保育園や小学校からはイベントへの招待もある。特に小学校との交流が盛んで、体験学習の小学生を毎月のように受け入れている。地域の演芸ボランティアがたびたび訪れており、隣のホームからも見物客がやってくる。

2. 評価結果（詳細）

（ ▭ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人の理念である「恕」を受けて、基本方針と介護方針が作成されている。この方針の中に、地域との連携についての基本的な考え方が述べられている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念、基本方針、介護方針を1枚の紙に書いて玄関に掲示している。「恕」に込められた管理者の熱い思いは、職員にも理解されて日々の実践へとつながっている。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	利用者も職員もほとんどがこの地域の出身者である。近所の農家から野菜の差し入れがあったり、保育園や小学校からはイベントへの招待もある。特に小学校との交流が盛んで、体験学習の小学生を毎月のように受け入れている。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価への一般職員の参画度合いは低いが、外部評価制度の意義や目的は理解されている。今回の自己評価は管理者が独自の判断で記入した。	○	自己評価への職員参加は、職員の能力開発面からも有効な教育手法となる。次代を背負う職員育成をも見据えて、職員の自己評価への関与を増大していただきたい。
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度、定期的に運営推進会議を開催している。同じ理念、同じ方針で運営されている「グループホームJO・さざんか」が目と鼻の先にあり、毎回合同開催となっている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容･実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	ホームと市の中心地には距離があり、行き来する機会は少ないが、管理者は「認知症ケア推進委員会」の委員として幅広く活動している。特段の問題や課題もなく、管理者は運営推進会議での情報交換で用が足りていると判断している。	○	制度改正への対応や事業所の新たな事業展開等、行政の助けを借りなければ解決できない場面もある。その時に必要な情報やアドバイスがもらえる関係作りは、普段のコミュニケーションが重要な意味を持つこととなろう。
4．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族を持たない利用者を除き、アンケートに答えた全ての家族がこの項目に大きな満足感を示した。ホーム便り「さざんかのやど」のマンネリ化を防ぐ意味もあって、直近号は手書きのホーム便りが作成されていた。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族から出た意見や要望は、ミーティングで職員全体の問題として討議されている。家族側からの申し入れがあり、ホーム内で起こった事故についての合意文書が取り交わされた。これは、職員の業務を委縮させないための家族側の配慮である。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動が少なく、ホーム開設以来勤務している職員も多い。利用者の安定は職員の雇用安定が基本条件であるとして、管理者は職員の処遇にも心をくだいている。		
5．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月1回開催しているサービス担当者会議の後に、職員を対象とした勉強会を実施している。管理者が講師となり、折々の話題性のあるテーマを学んでいる。	○	時には管理者が講師を外れ、職員を講師とした勉強会の実施を推奨したい。教えるということは、教わること以上に知識や技術の向上につながる。職員育成の面からも一考を望みたい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は様々な団体の役員を務めていたこともあり、同業者との太いパイプを持っている。新たに開設するホームのオーナーや管理者が見学に訪れることもしばしばである。地域性もあり、職員や利用者が他のホームと交流する機会は少ない。	○	管理者の提唱するネットワークづくりが、管理者や職員の交流から利用者の交流にまで発展することを期待したい。ネットワーク作りは旗振り役の熱意だけでは実現は難しく、ホーム運営の堅実さ（職員の雇用の安定）が必須となる。その面でもなんら心配はなく、まさに機は熟している。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用開始直後の利用者の混乱を防ぐため、利用前に納得いくまでホームの見学をしてもらっている。利用希望者本人に、職員だけでなく他の利用者とも会わせることで、少しでも早く馴染みの関係を作ろうとしている。		
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	介護度の進んでいない利用者もおり、日常の家事を職員同様にこなしている。主婦である職員は、包丁のとぎ方、旬の野菜の調理方法、漬物の付け方等々、先輩主婦である利用者から教わっている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のケアの中で利用者の新たな一面を見つけた時、職員はその気付きを「なんでもノート」に書き込んでいる。全ての職員が閲覧することになっているが、ミーティングや月例の会議のテーマとして取り上げられることもある。		
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	日頃の係わりの中での本人や家族からの意見や要望のほか、日々の様子・申し送り事項・要注意者の情報が書き込まれた「朝礼・なんでもノート」の記事や職員ミーティングの中から改善事項を探り出し、介護計画に反映させている。	○	利用者や家族の意向・要望等の聞き取りが形骸化しており、介護計画への反映が薄くなっている。職員によるモニタリングの結果と、本人・家族の意向とを合わせてホームの介護方針を作り、その方針の下に目標設定とケアの内容を検討することを推奨したい。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	サービス担当者会議で介護計画の見直し・検討を行っており、新たな方針の決定やケアの内容変更は1枚の介護計画書の中で行われている。	○	1枚の「介護サービス計画書」の中で見直しや検討が行われていることは、ケアの継続性は担保されるが時間的な経過や目標に対する評価の結果は分かりづらい。状態変化時や定期的見直し時（3～6ヶ月に一度）には、新たな「介護サービス計画書」を作成することが望ましい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3．多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	家族からの要望の一番強いものは、通院への付き添いである。往診してもらえる医療機関がないことから、家族の要望に沿った支援を行っており、会社を中途退職した管理者のご主人（職員）が、ドライバーとして毎日ホームと病院間を走っている。		
4．本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	提携医（足助病院）からは距離があり、往診はない。利用者の受診には家族の協力が得られにくいこともあり、殆どの場合職員（管理者のご主人）が付き添っている。家族アンケートには、管理者が看護師としての経験が豊富であることを評価するコメントがあった。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化・終末期に対する対処法については利用契約時に説明し、意思確認書を提出してもらっている。看護師である管理者は、医療機関の直接支援が期待できないことから、ターミナルケアの限界を認識しており、看取りはしない方針を持っている。		
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 1．その人らしい暮らしの支援 (1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	男性職員による入浴介助にためらいを感じている女性利用者がいる。女性職員が対応できない時は、その日は無理に入ってもらわず、日を改めるなどして利用者の意思を尊重している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	昼食開始時には利用者全員が集まったが、食事を済ませると足早に居室に戻る利用者がいた。居間のソファーでくつろぐ人、後片付けに精を出す人等々、利用者それぞれが毎日の過ごし方のパターンを持っている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	職員に交じって、女性利用者が食事の準備から後片付けまでの主婦の仕事をこなしていた。近隣の農家からのいただきものも多く、昼食は季節の食材が多く使用されていた。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	ほぼ2日に1回の入浴であるが、入浴を嫌う利用者には決して無理強いはせず、本人のペースを尊重している。ゆず湯につかり、利用者は厳しい冬の訪れを感じ、菖蒲湯で夏の足音を聞くこととなる。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	女性利用者は、元気に家事を手伝う姿が目に付く。利用者には男性が多いが、加齢や介護度の進行によって、これまでできた家庭菜園での作業や楽しみ事はできなくなってしまっている。食後、自室に戻って読書にいそしむ男性利用者の姿があった。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	ホームの周囲は緑豊かな自然に囲まれている。朝早く、職員とともに車いすの女性利用者が散歩に出かけて行った。春には花見、秋には紅葉と、四季の彩りはホームを一歩踏み出しただけで満喫できる。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	正規の玄関は職員のいるホールと反対側にあり、目が行き届かないことから常時施錠されている。職員や利用者は、ホール側にある勝手口から出入りすることが日常となっており、ここのドアは施錠されていない。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消防署立ち会いの災害訓練を実施したり、毎月19日を「防災の日」に定めて夜間を想定した避難訓練も実施している。近所には民家が少なく、最も近い民家は管理者の自宅である。災害時の非常食やガソリン発電機は管理者宅に保管してある。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の献立は一般の家庭料理が主となっており、毎食数多くの野菜が食材として使われている。副食の品数も豊富で、利用者にとっては楽しみとなっている。食事量、水分摂取量のチェックをしており、健康管理は月2回の体重測定の結果を目安としている。	○	サービス担当者会議後の勉強会の機会を活かし、栄養やカロリー、健康に関する勉強会を開催されることを望みたい。専門家に委ねなくても、職員全員がおおよそのカロリー計算は可能となるはずである。
お (1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	窓を開ければ、幹線道路を走る大型トラックの騒音が入ってくるが、それにもましてさわやかな自然の風が心地よい。食堂と続いているホールは広く、大きな応接セットが置いてある。このホールでカラオケ大会や各種のホームイベントが開催される。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	101歳の男性利用者は、居室にたくさんの教科書(文部省選定、戦前の復刻本)を持ち込んでいた。リューマチで悩む女性利用者のベッドには、布で作った縄が張られており、足をひっかければ自力で起き上がれるように工夫してあった。		